〔東京家政大学研究紀要　第35集 (1), P. 21～33, 1995〕

クセノポーンのオイコノミア思想Ⅲ
－夫婦のパートナーシップと秩序論－

関　根　靖　光

(平成6年9月30日受理)

The Idea of Oikonomia in Xenophon's "OIKONOMIKOS" Ⅲ

Yasumitsu SEKINE

(Received September 30, 1994)

序

古代ギリシャのクセノポーンの著書『オイコノミコス』は，オイコノミア思想の古典とされている．その中核的部分の解説およびオイコノミア術の達人であるイスコマコスの理想的生活観については既に紀要等で紹介済み(注1)であるが，簡潔に復習すると，クセノポーンにとってオイコノミア術とは，所有物（クテーマタ）を活用して真の富（クレーマタ）に変容させるあらゆる術を総称するものであった．例えば，所有している馬を巧みに乗りこなし活用する馬術，所有している土地を上手に耕して農産物の収穫を上げる農耕術，更に所有している笛をうまく吹く吹奏術や手持ちの金銭を効果的に使って生活を適度に豊かにする術等など，すべてオイコノミア術に属すとされる．勿論，衣食住に関わる所有物の活用術である「家政術」も含まれる．そのような意味で，オイコノミア術を「家政術」にのみ限定してそれと同一視したり又そのように翻訳することは不適切なのである(注2)．

ところでこれらオイコノミア術の究極目的はどこにあるか．クセノポーンの言い方を用いれば，「美にして善なる生活」の実現にこそある，(注3)と要約できよう．登場人物であるイスコマコスの弁を借りて具体的に言えば，健康で身体的に強壮，ポリス（社会生活）においては尊敬，友人間においては好意，戦争の際は栄誉ある無事帰還，財形に関してはきれいなやり方での富の増加，これらが日常において実現されている状態が「美にして善なる生活」である．彼はこの理想的生活実現のため，倦まず弛まず終日，心身の訓練や鍛練に精を出し，配慮に磨きをかけるのである．

以上，簡単なおさらいであったが，今回は「国際家族年」に因んで，この広範で多種多様なオイコノミア術を特に「家政術」の基底的領域に限定して，イスコマコス（即ちクセノポーン）がそれをどのように考えていたかを考察することにしよう．テーマとしては，次の3点に大別される．即ち，「夫婦のパートナーシップ論」，「結婚論」及び「生活空間秩序論」

§1　妻教育の開始

第一のテーマである「夫婦のパートナーシップ論」への導入部は、ソークラテースが「美にして善なる人物」として誉れ高いイスコマコスを見かけて、なぜ彼がそのように呼ばれるようになったのか、その秘訣をぜひ聞こうと彼に近づき、おずおずと質問するところから始まる。

「何かこのようなこと（客と待ち合わせ）をしていない時，あなたはどこで時を過ごしているのですか，というのは，あなたは（普段）屋内（エンドン）で時を過ごしていませんし又あなたの身体の状態もそのように見えないのですから．そうだとすると一体，何を実行することによってあなたは美にして善であると呼ばれているのですか」（原典７－２）

これに対してイスコマコスは，農場経営を中心とする自分の屋外の仕事（原典15章以下）の説明は一先ず控え，むしろ，「私の家の中の事どもは妻が十分に管理してくれるので自分は屋内にいる必要がないのです」といった内容の釈明をし，ソークラテースに促されるままに，二人の結婚生活を中心に屋内の仕事，いわゆる家政術プロパーの領域の根底に関わる事柄について語り始める．イスコマコスによれば，彼の妻は15歳にも充たない年令で

第2哲学研究室

嫁いで来た（当時は普通であった）ので，結婚生活のイロハから彼女を教育（パイデイア）する必要があった．

［現代：さしずめ現代では，男性の生活年令（？）の方こそ恐らく15歳にも充たないであろうから，むしろ女性（妻）がイスコマコスのような立場に立って男性（夫）を根本から徹底的に教育することになるだろうが］

ともかく，幼い彼の妻も納得した上で，対話的方法による妻教育が開始される．その最初のテーマは「夫婦のパートナーシップ」である．

§2　夫婦のパートナーシップ

妻教育の第一過程は驚いたことに，妻が「彼に慣れ親しみ，又話し合えるくらいなじむ」ようになるや否や直ちに始められる．

最初の質問（7－10～11）にも度胆を抜かれる．

「妻よ，私に答えてくれ，私が（他の誰でもない）あなたを（嫁として）迎え入れ，又あなたのご両親があなたを（他の誰でもない）私に与えて下さったのは一体どんな理由でか，あなたには既に分かっているかどうかを」

結婚生活の出発にあたって最も重要な事柄，即ち，何故自分達二人が結婚するに至ったのかの理由を確認し合うことを，彼はなによりも最優先させている．そんな夫婦はそうそういるものではない．希有と言っていいのではないか．

この問いに対する妻の返事が原文にないところを見ると，恐らく妻はこの唐突な問い掛けにしばし言葉を失ったと推察される．代わりに年長のイスコマコス自身が，二人の結婚理由を説くことになる．

「（妻よ，いいですか，）私自身は私のために，そしてあなたの御両親はあなたのために，オイコス（所有物のすべて）と（生まれ来る）子供達のための最上のパートナー（ベルティストス　コイノーノス）として（あまたの花嫁・花婿候補の中から）誰を受け入れようかと熟慮した上で，私はあなたを又あなたの御両親は，恐らくそうだと思いますが，有能な人々の中から私を選び出したのですよ」（7－11）

オイコスの最上のパートナーとは，端的に言えば，夫婦の共有オイコス（所有物）を善く活用して富とし更には剰余をも生む上で自分達二人が最上のパートナーという意味であり，子供達のための最上のパートナーとは，子供達を美にして善なる人間へと協力して教育する上で二人が最上のパートナーであるという意味である（他に，身体のパートナーという考えも導入されるが，それも含め詳細は本論後節を参照）．

結ばれたのが何故この二人であって他の人間ではなかったのかの説明として，これ以上説得力あるものはないのではないか．未知の生活への船出を前にしていささか不安を覚えていたに違いない彼の妻も，彼のこの言葉で大いに励まされ，矜持の念で心が一杯に満たされたことだろう．

［現代では，ただ愛し合っているから，というのが二人の結婚理由の筆頭に上るからも知れないが，両者の愛情が常に生活のパートナーシップの相互確認へと具体化されない限り，愛の生活も永続化されにくいのではないか］

§3　子供達のためのパートナーシップ

イスコマコスはオイコスのパートナーシップについて話す前に，子供の教育に関し2，3重要な事を提案する．曰く，子供達には最善の教育を施す必要があり，その方法については自分達二人が（パートナーとして）責任をもって考えていきましょう，と．しかし残念ながら養育論や教育論の詳細は原典のどこにも特に展開されていない．それというのも，新婚早々でまだ子供に恵まれていない時期での対話ということだからであろう．子供の誕生と共に妻との教育的対話が再開されると推測される

ところで，たとえ言及されていなくても，子供の教育の大目的がイスコマコスと同様，「美にして善なる人間になること」にあることは間違いない．その他に子供に最善の教育を施さねばならない理由として彼は次の2点を上げる．

「というのは，（自分達にとって）出来るだけ善い味方達と，老人（になった自分達）の出来るだけ善い世話役達を得ることは，私達（夫婦）の共通の善なのですから」（7－12）

これだけ聞けば，親のエゴから子供を設け教育するかの印象を与えるが，「美にして善なる人間」教育に加えて更に，親孝行を考慮した教育も真剣に施すべきだとの考えに立つと解釈できる．ともかく彼の妻は，夫婦二人の共通善のためにも，自分達が協力して子供教育に邁進せねばならないことを肝に命じたことだろう．

［現代は核家族化の時代と言われているが，老親の世話や介護は誰が行うのであろうか．又，高齢社会の到来

と共に3世代或いは4世代同居家族が増えるとも予想されている．その場合，老親達の世話や介護の責任は誰が担うのか．嫁の過重負担が叫ばれている現在，イスコマコス指摘の課題は夫婦のみならず社会全体の急眉の問題となりつつある．もう一つの問題提起．子供の（家庭）教育におけるパートナーシップが現代どれだけ自覚されているだろうか．妻に偏重され過ぎていないだろうか］

さて原文はいよいよ本筋であるオイコスのパートナーシップ論に突入する．

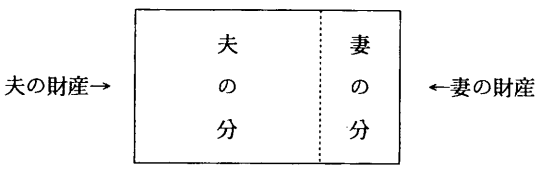
§4　オイコスの共有性の確認

イスコマコスはまず，結婚する際に二人が別々に持ち寄った各々の所有物（＝オイコス）を，これからは二人で共有することになる旨，明確に宣言する．

「さて（妻よ，いいですか）今や私達（夫婦）にとってこのオイコスはコイノス（共有）です．というのは，私は私にとっての（財産の）すべてを共同物の中へと払込み，他方あなたはあなたで，あなたが持参した（財産の）すべてをその共同物の中へと提供したのですから」（7－13）

瞬間的に妻の脳裏には下図のように，「ト　コイノン（共同）」と書かれた巨大な箱が浮かび，その箱の中に彼女の持参した財産の一切合財と，夫の所有する莫大な財産のすべてがすいこまれていくのを表象したことだろう．

共同財産箱



当然両者の持ち寄り分には量の相違がある．しかし共有されることになる限り，持参した財産の多寡で気兼ねする必要は毛頭ないことを彼は直ちに付言する．

§5　共有オイコスへの貢献度判定の原理

結婚生活の財政的基盤である共有オイコスに関して，夫婦は全くの平等であるべき，というのがイスコマコスの主張である．それへの貢献度は持ち寄った財産の大小で評価されてはならない．全く別の観点から判定されるべきである．

「私達どちらの方が，数量の点で（共同財産に）より多くの寄与したかどうか，くよくよ考える必要はありませんよ．むしろ，私達のどちらにせよ，より善いパートナーである者の方が，（正に）より多くの価値を寄与しているのだ，ということをよーく知っておくべきです」（7－13）

彼の妻は本当にほっとしたことだろう．しかしすぐに，それではパートナーとして，小娘のような自分が果たしてどんな貢献ができるか，心許ない気分に陥ってしまう．というのも彼女は恐る恐る次のように問うているから．

「それで私はあなたに，どういうことで（パートナーとして）御協力できるのでしょうか？私の出来ることは何でございましょうか？（中略）母の申しますことには，私のエルゴン（為すべきこと）は，ソープロネインとの事でしたが」（7－14）

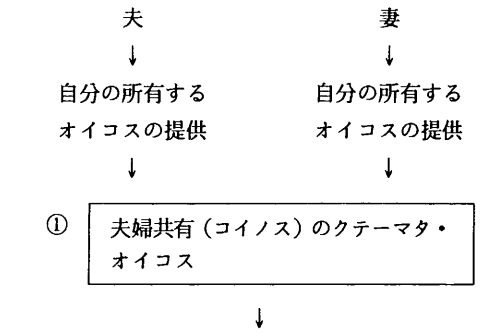
§6　男女共通の行為の基本原理「ソープロネイン」即ち「オイコノミア」精神

「ソープロネイン」とは通常，「慎み深い」「賢明である」と訳せる．となると，彼の妻は結婚前に，妻の心得として「慎み深く，賢明である」よう母から助言されたのだ，と読める．

これに対してイスコマコスは実に巧妙に，その同じ用語を用いて，「オイコノミア」精神とそれに関するパートナーシップを妻に教える．このことの理解のためにオイコノミア術の基本図形を復習しよう（注4）．

① クテーマタ（所有物）としてのオイコス
↓
② オイコノミア術の知識とその活用
↓
③ クレーマタ（富）としてのオイコス＋剰余

次に上図を基に，夫婦共有のオイコスに関する夫婦のオイコノミア・パートナーシップを，先取り的に図型化しておこう．



夫婦のパートナーシップに基づく
オイコノミアの知識と活用

②
共通或いは夫固有の
オイコノミアによる→
夫パートナーの働き

共通或いは妻固有の
←オイコノミアによる
妻パートナーの働き

③ 夫婦共有（コイノス）のクレーマタ・オイコス＋剰余

さて，妻の「ソープロネイン」発言を聞いたイスコマコスは以下のように，その用語の彼なりの解釈を提示して，彼女を「慎み深い」などの素朴な理解から，上記の如きオイコノミア・パートナーシップにそれとなく教導しようとする．彼曰く

「妻よ，全くその通りです．実は父も私にそう言ったのです．ところでソープロネインということですが，これは男女を問わず正に次のように行為することなのです．

即ち，タ　オンタ（本来は「現に在るもの」の意であるが，ここでは現に所有している物と解しうる）を，出来るかぎり最善の状態に保持していき，更に，他のものどもが（剰余）出来るかぎり多く，しかも美しく且つ正しい仕方で付け加わるようにすること，なのです．」（7－15）

上記の夫婦のパートナシップに基づくオイコノミア図型の，「オイコス」という用語の代わりに「オンタ」という用語を入れよ，且つまた用語「オイコノミア」の代わりに用語「ソープロネイン」を入れよ．彼の「ソープロネイン」活動がいかに「オイコノミア」活動に酷似するか，いや，正に同値であることが一目瞭然となろう．

かくして，共有オイコスへの貢献度の判定に関し先にイスコマコスが主張した内容がよく理解できることになった．即ち，夫婦の貢献度は図型の②におけるオイコノミア・パートナーとしての両者の働き具合に基づくと．そして原典7－27では，彼らの働きのいわば報償の多寡がこのパートナーとしての貢献度の多寡に基づくとも主張される．曰く，

「男性であれ女性であれ，そのどちらが（パートナーシップを発揮する点で他よりも）より優れていたとしても，神はその者の方に（こそ）アガトス（善，善いこと，剰余）のより多くを受け取る権利を授けたのです」

妻にとって何という朗報であろうか．ともかくここには，民主的平等を享受する類い稀な夫婦がいる．少し先走ったが話を元に戻そう．

いずれにせよ，聡明な彼の妻はソープロネインの意義を概ね了解する．その上で更に次の問．

§7　夫婦の役割分担論への序奏

「（そのようなソープロネインに励むことは分かりましたわ，）それでは，（ソープロネインとして具体的に）何をすれば，私は（共有する）オイコスを（あなたと）御一緒に大きくする（増やす）（スュンアウクセスタイ）ことができるのでしょうか」

イスコマコス答えて曰く，

「神かけて確かなことですが，①神々が，それらが出来るようにとあなたを（この世に）生ぜしめたその当の事どもと，②慣習や法（ノモス）が声を揃えて賞賛している事ども，これら（両者）をあなたは最善を尽くして実行するよう努めなさい」（7－16）

①の神々が定めた事柄とは，今風に言えば，自然的・生れつきのものと言い直して良いだろう．それは②の人為的慣習的なものと区別される．しかしどちらであれイスコマコスは妻に対し，「女性は……すべき」「妻は……すべき」と，生れつき定められ且つ法・慣習的に義務づけられている事柄を実行するように勧めているわけである．彼に言わせれば，それがソープロネイン（＝オイコノミア）として妻パートナーが為すべきことの内容である．が，彼の妻はまだ十分には把握しない．更に畳み掛けて彼に尋ねて曰く，

「（具体的に）それらは何でしょうか」（7－16）

本格的な妻教育の幕がここから切って落とされることになる．

［夫婦生活を巡る現代の諸問題の根底に，性差による夫婦の役割分担に対する不満が渦巻いている．女性の自己実現の基本的権利を阻害する一大要因として役割分担制は特に女性の側から痛烈に批判されているのである．この点に限れば，根本のところで古代ギリシャと現代日本とで状況はそれ程大きな相違はない．そのような意味で，これから展開されるイスコマコスの議論は良きにつけ悪しきにつけ，極めて現代的意味を持つと思われる］

§8　男女を夫婦一対と為した神意

結婚生活に関わる根本テーマについてのその根拠・理由から話し合いし，双方了解し合った上で夫婦生活を営むべきである，というイスコマコスの対話重視の態度（現代ではとんと見かけないものであるが）はここでも発揮される．妻が何をすべきかのリストを，家長として命令口調で教示するのではなく，男女の結婚とはそもそもどういう意義を持つのか，そこから夫と妻はどのような行為をなすべきか，といった根本的なところから彼は対話を展開せんと努める．

まず，何故男女は夫婦として分かちがたく一対にならねばならないのか，の理由（神意）の神学的説明を与える．曰く，

「妻よ，どうも私には，神々が十分熟考した上で，パートナーシップ（コイノーニア）の観点から彼ら（男女）に最高の益があるようにと（配慮されて）（中略）一対としてお組み合せになったように思われるのです」（7－18）

双方にとって最高の益とあるが，その具体的内容は何か．

§9　夫婦のパートナーシップの3益

イスコマコスの挙げる夫婦一対の3益とは，

① （男女から子供が生まれてくることにより）種の保存が可能となる（7－19）

② （子供がうまく育てられれば）自分達が老人になった時の世話役が確保できる（7－19）

③ 人間は，他の動物にない人間固有の生活様式即ち生活をしていく為にはステグノス（覆われた場所＝家屋＝住居）を必要とし，又そのステグノス（簡単に「家」）の内と外に分業を必要とするのであるが，正に性を異にし性質も幾分異なる面（共通する面も多い）を持つ男と女がそれら分業の丁度よい担い手となる．長所・短所を持つ男女が夫婦として一緒に生活することにより，両者の欠陥は補完され，一人で生活する場合と比し両者に益がもたらされる（7－19～28）

上記3益のうち①②は結局，子供を生むことに関連し，③は夫婦の役割分担論につながる（この後の大議論はもっぱら③に関わる）．彼の卓越したところは，これら自明の理を自明のままに放っておかず，改めて根本から夫婦の対話のテーマにしていることであろう．

［結婚するとはまず子供を生むことにある，という点の相互確認の重要さは現代において益々際立ってきていると思われる．というのは，昨年のカイロの国際人口・開発会議でクローズアップされたように，性と生殖（出産）と結婚は，現代では別々の要素と見做されがちであり，それらが一つに連なるという古典的考え方はいまや単に一つのライフサイクルにすぎないと取られる傾向にあるから．今これらを別々の3要素と見做し，各要素に関して人は「望むことと望まないこと」の2値しかとれないと仮定するだけでも，一人の人間の選び得るライフスタイルは，単純な組合せ論から8ケースあることになる．例えば，性も生殖も望むが結婚は望まないなど（生殖を望まないことが断種や堕胎の是認につながるかどうかは，カイロ会議でも紛糾したように，大人の基本的人権と胎児の基本的人権関わる最重要の問題である）．さて二人の男女の組合せを考慮すると，64ケースもある．これが同性間か異性間か，という選択肢なども加わるとなると，更に増えていくことになろう．ともかく現代はライフスタイルの多様化を主張する時代だと言えよう．しかしこのように選択が自由になり多様になればなる程，性を望むか望まないか，結婚を望むか望まないか，生殖（出産）を望むか望まないかなどの論点，つまりどのようなライフスタイルを選ぶかという問題は，以前よりより一層真剣に自覚的に夫婦で討議し相互に確認すべきことではないだろうか］

§10　ステグノス（家屋）を巡る生活空間論

イスコマコスは，夫婦一対の第3番目の益に関する考察，即ち役割分担論を，彼らしく生活基底の根本的反省，即ち生活空間論から始める．そこでのキーワードはステーゲー（覆い，屋根，家屋）ないしステグノス（覆われた場＝家屋）である．

「人間にとって生活の場は，家畜のように戸外にはなく，ご存じのようにステーガイ（ステーゲーの複数；家屋）を必要とします」（7－19）

彼は人間が体験している生活空間の中核にまずステノグノス（家屋）を設定している．そのことによって生活空間は必然的に，ステグノスの内部と外部，即ち屋内と屋外に大別されることになる．しかしこの空間領域の2分化はその根拠を，空間外の観点，つまり生活上の基本的仕事の性格に置いているのである．彼の主張を分析す

れば，生活上必要不可欠な諸々の仕事（エルガ）は次の3タイプに区分されることになる．

① 生活必需物の生産：農耕，園芸，畜産など

② 生活必需物の保管：生産された生活必需物を維持・保管する仕事

③ 屋内固有の諸仕事：子供の養育，保育，食物の加工，調理，被服制作など，いわゆる児童保育・栄養調理・被服制作といった家政的仕事

上記の①は屋外（戸外）で良いが，②③はステグノス（覆い）を必要とし，もっぱら屋内で営まれる．ということで，基本的にはエルガ（仕事）観点から生活空間は分節化されるのである．ところで，このように生活上の仕事が屋内の仕事，屋内の仕事に2分されるとなると，次の問題はそれぞれを誰が担当するか，ということになろう．夫婦の役割分担論に俄に肉薄することになる．

§11　夫婦（男女）の役割分担論及び性差論

彼の妻は，とうとうパートナーとしての自分の仕事について明らかにされるとの予感で，身内の引き締まる思いであったろう．夫の彼の発言．

「それら屋内の仕事と屋外の仕事は両方とも，活動（エルゴン）と配慮（エピメレイア）必要とするのですが，神様は最初から，女性の性質（本性：ピュシス）を屋内の仕事（エルガ）と種々の配慮向きに，そして男性の性質を屋外の仕事と種々の配慮向きに整えられたと思うのです」（7－22）

彼女は，ああやはりそうか，と思ったに違いない．多分，彼女の実母は屋内の仕事に精出していただろうし，実父は屋外の仕事に専念していただろうから．

ところでイスコマコスの感心するところは，以上の内容をただ闇雲に主張するだけでなく，妻を論理的に説得もしようとしている点である．さすがソークラテースの薫陶を受けただけのことはある．紙数の関係で，以下，彼の議論のほんの一部のみを紹介する．論理的分析によって，その議論の構造的特徴及びその欠陥も明らかにされよう．

彼の議論をより理解し易くする為，彼が暗黙の中に前提していると考えられる命題を（　）のカッコ付きで付け加え，どうにか三段論法の形に変形した上で，分析してみることにしよう．

議論A：男女における心身の耐久性の程度の相違

① 神は，男性の心身をして，寒さや暑さ，徒歩や出征を（女性のそれより）より多く我慢できるようにと定められた

↓

② （心身の点で，寒さや暑さや徒歩や出征により多く耐えられる者は，屋外の仕事向きである）

↓

③ 故に，神は男性に屋外の仕事を課した（に違いない）

［語用論的エポケーと意味論的変形］

この議論には，「神の定め」という語の使用により，有無をいわさぬ仕方で人々を説得する効果が備わっている．しかし議論の内容にのみ関心があるので，この「神」という語のイデオロギー効果を一時的に中止（エポケー）することにしよう．その為に「神」という語は除外する．更に，文中の「男性」は，意味論的には「端的にすべての男性」を意味すると解すべきであるから，「男性」という語に「すべて」という修辞を加え，文を全称命題化しよう．すると上記の三段論法は次のように変更される．

①' すべての男性は，心身の点で寒さ・暑さ・徒歩・出征をより多く我慢できる

②' （心身が，寒さ・暑さ・徒歩・出征をより多く我慢できる者はすべて，屋外の仕事向きである）

③' 故に，すべての男性は屋外の仕事向きである

［記号論理学的単純化］

上記の言明中，「男性」をM，「心身の点で寒さ・暑さ・徒歩・出征をより多く我慢できる」をA，「屋外の仕事向き」をO，と記号化すると上記の三段論法は，

①" すべてのMはAである

②" （すべてのAはOである）

③" 故に，すべてのMはOである

これは，いわゆるアリストテレース的三段論法で言えば，Barbaraであり，統辞論的には正しい推論形式である．

［考察］

しかし前提部分の事実上の真偽に関してはどうであろうか．①'に関しては，事実上，言及されている「寒さ・暑さ・徒歩・出征」の点ですべての男性がすべての女性よりも我慢強いという筈がない．統計的事実としてはせいぜい比較的多くの男性が，女性より強い，という位しか主張できないだろう．このような常

識的な統計的事実に立てば，大前提の①'は間違っていることになる．事実を反映させた三段論法は概ね次のようになろう．

①'－1　ある男性は，心身の点で寒さ・暑さ・徒歩・出征をより多く我慢できる

①'－2　そのような男性の数は女性より多い

②'（心身が，寒さ・暑さ・徒歩・出征をより多く我慢できる者はすべて屋外の仕事向きである）

この2（ないし3）前提から次の結論が導き出されるだろうか．即ち，

③'　故に，すべての男性は屋外の仕事向きである

明らかに形式論理学の立場からも，妥当な結論として③'は導出されえない．せいぜい，「故に，ある男性は屋外向きである」或いは「多くの男性は，女性と比較して，屋外向きである」が結論できるだけである．

議論B：女性の役割としての新生児養育について

①（神は）女性に，新生児の養育を植え付け，命じられた

↓

②（新生児の養育の担当者としては，新生児に対する愛着がより豊かな者が適任である）

↓

③　故に，（神は）男性より女性に，新生児を愛する気持ちをより多く分配された

［考察］

今度は女性の役割に向けた議論である．これも語用論的エポケーを施し意味論的に変形し記号化すると構造が見えてくる．先の三段論法とは論法の順番が異なっていることに気付かされるだろう．さて，この推論の特徴は何であり，無理があるとしたらどこにあるか，詳細は拙著の方を参照していただきたい．

イスコマコスは，屋外の仕事は男性向き，屋内の仕事は女性向きであることを論証する上述のような議論を他にも展開しているが，ここでは割愛する．ただ内容の概要だけを紹介すれば，①女性は寒さ・暑さ・徒歩・出征の点で男性より耐久力が劣るので，屋内の仕事向きである②神が女性に，屋内に運び入れられた生産必需物の監視役として命じたが故に，女性は男性より臆病である③外部からの侵入者に対しては屋外の担当者が撃退することになっているが故に，神は男性により多くの勇気を与えた．

いずれにせよ分析の結果，これら議論の欠陥が何らかの点で判明する．

しかし多分彼の幼妻は夫の議論を，社会的に認知されている正常な事柄を正常な論法で展開していると感じて，十分納得したことだろう．

［恐らく現代でも，男女の役割分担賛成論者にその根拠を問えば，上記に似た議論を表明すると思われる．そして同じような論理的間違いも．この問題の根深いところは，論理的間違いがあろうとなかろうと，役割分担制度が社会の深層イデオロギー（＝神は定めた！）として厳然と存在し続けるだろうことである．女性が男性と同様の自己実現の基本的権利があると主張する人々にとって役割分担制は女性だけを屋内の仕事に限定し屋内に幽閉する人権侵害の悪制度ということになろう．カイロの人口・開発会議の焦点の一つである，性と生殖に関する（男性と同様の？）女性側の自由選択の基本的権利の主張は，根底にこのような役割分担制に対する批判，そして究極的には女性の自己実現の基本的権利獲得を内含していると推察される．かくして役割分担問題は，人口問題，環境問題，人権問題（胎児の生存権も含め）など21世紀に向けた根本的諸問題と輻湊的に絡み合っている．私個人は，性差に関係なく，夫婦が話し合いの上で役割を選び合えば良いと思っているが．イスコマコスの議論に戻って強調すべきことは，その議論に瑕疵があるとしても，彼が暗に自明なことをそのままにせず真正面から妻との対話の俎上に乗せ，その正当性を論じようとしている点であろう．民主的精神に満ちている彼の家庭においては，妻が不満ならディベイトする権利が当然のことのように彼女に認められている．基本的なことの話し合いは一毫ももたず，自明性の上にあぐらをかいたあげく2，30年後に不満爆発，といった自称民主的な我々現代人もぜひ見習いたいものである．彼の考え方の卓越している点をもう一つ付け加えれば，屋内・屋外の仕事に優劣を全然付けていないことである．どちらも片方が欠ければ無意義になってしまう．彼にあっては，仕事の等価値的相補性は，夫婦のパートナーシップの平等的相補性と不即不理の関係にある］

§12　夫婦(男女)共通の性質，即ち性通論

性差による役割分担に続けてイスコマコスは，男女共通の性質にも言及する．それらは，①記憶力②注意力③自制力．屋内・外の区別なく，どれも生活業務を遂行する上で必要な資質で，彼はそれらが男女の区別なく平等

に与えられていると説く．従って妻よ，私達夫婦はその点に関してお互いに向上していこう，ということだろう．以上，イスコマコスの性差論・性通論は，神の定め，或いは自然の立場からの立論であったが，彼はノモス(慣習，法)という人為的規範の立場からも夫婦役割分担論やパートナーシップ論を補強しようとする．かいつまんで紹介しよう．

§13　ノモスによる、役割分担とパートナー論

曰く，「ノモス（法，慣習）も男と女を一つの軛（ゼウゴス）につなぐことで，（神々と）声を揃えて（その一対になった）彼らを承認しているのですよ」（7－30）

更に曰く，「神は(男女，夫婦を)子供達の(ための)パートナー(コイノーノス)とされたのでしたが，ノモスの方も彼らをオイコスの(ための)パートナーへと定めているのです」（7－30）

イスコマコスによると，神の定めた男女の役割（即ち，女子は屋内，男子は屋外の仕事）をその通り実践することこそ美なり（カロス），とノモスにちゃんと明示されているとのことである．この区別をごっちゃにすることは醜（アイスキオン）であり，いずれ神から天罰を受ける羽目になると妻に明言する．

彼には妻を脅すつもりは毛頭なかったと思うが，彼女は社会の基底的イデオロギーの恐ろしいばかりの圧力をひしひしと感じ取ったに違いない．

§14　アガトス（善，利益）享受の原理

ところで，夫婦の仕事上の役割やパートナーシップ論が一応一段落したいま，彼の妻は，本日これから屋内の仕事に一意慢進しようという気持ちになったことだろう．しかしその前に，二人の共同作業の赫々たる成果（アガトス＝善，剰余，利益，）をどういう原理に従ってどう分配し，お互い納得づくでどう享受すべきか，妻に明確に説明しておく必要があるだろう（本論§6も参照）．

その原理とは（彼曰く），男性であれ女性であれ，パートナーとしての貢献度が大である者の方にこそアガトスをより多く受け取る権利あり，というもの（7－27）．

男性の方が女性より，夫の方が妻より地位的に上位で，従ってアガトス享受は当然前者により多くなるべし，といった差別観はイスコマコスには微塵もない．同様に，屋外と屋内の仕事の間にもいかなる優劣関係も想定しない．重要なのは，各々がパートナーとして自分の役割を力一杯遂行することのみである．そのパートナーとしての行為による貢献度こそ，二人のどちらがより多く成果を享受できるかの判定基準となる，というのが彼の「報酬の正義論」である．

この原理を夫からはっきり聞いた妻は，ますますやる気満々になったのでないだろうか．

§15　妻のあり方・働きを女王蜂のそれと比較

イスコマコスは恐らく妻に，彼女の仕事の内容や意義を，より具象的に，より包括的に理解してもらいたいと思ったのだろう，女王蜂の比喩を用いて再度，妻の意義やその務めについてイメージ豊かに語っていく．

本論ではその詳細な比較表など紙数の関係ですべて省略するが，一つだけ指摘するとしたら，彼の妻はその比喩話のおかげで，家における妻としての自分の立場が，巣の中の女王蜂の圧倒的に重要な立場に酷似することに気付かされて，誇りと希望の念で胸一杯になったのではないだろうか．

§16　パートナーシップの高らかな讃歌

ここまでの話から，イスコマコスがいかに民主的・対話的夫婦像の持ち主で，しかもその模範的実践者でもあったか，十分お分かりになったことと思う．最後に，彼がこの教育（パイディア）階梯前半を終えるにあたって妻に贈った輝かしい言葉に耳を傾けていただきたい．これは妻に対する愛の讃歌以外の何物でもない．

> 「(妻よ，) もしあなたが（パートナーとして）私よりも優れていることを身をもって私に示し，私をあなたの召使にするならば，そして年齢が進んでも，家の中で一層尊敬されなくなるのではないかとあなたが恐れる必要がないどころか，かえって，歳をとればとる程私にとっては益々善いパートナー，子供達にとっては家の益々善い守護者（ピュラックス）になり（その結果）家において益々尊敬されるようになる，とあなたが信じるならば，（これこそ私にとって，）あらゆることの中で最高に悦ばしいことですよ」（7－43）

［この発言はなんと素晴らしく革命的な宣言であろう．常識を鮮やかに吹っ飛ばし，逆転させてしまう破砕力．世の亭主関白であれば，「妻がパートナーとして優れていることを示す」ことなど，まず頭っから認めたくないことだろう．いや，そもそもパートナーとも思わないか．

それが驚いたことに，「妻がより優れていることを示すことで，自分が妻の召使になる」，しかも「そのことは最高の悦びである」と明言している．男性社会（現代の日本もそうであろう）の匹夫などが最も持ちにくい発想であろう．これらの発言から，イスコマコス≒クセノポーンが，もう根っからの男女対等観の持ち主と言わざるを得ない．残念ながら，男女の役割分担に関しては，保守的イデオロギーを堅持しているのではあるが]

対話と議論による上記の教育課程が終わるやいなや，彼の妻は放たれた駒のように屋内の仕事に突撃し，家事万端に獅子奮敏迅の働きをしたに違いない．ところが，幸福な夢中の状態がしばらく続いていた矢先，突然，或る事件が起き上がった．

§17　暗転――事の発端

イスコマコスはソークラテースに，その日の出来事を次のように想起する．

「(その頃のことですが）妻がものすごく取り乱し，猛烈に赤面したことがあったのを（よく）覚えています．どうしてそうなったのかと言いますと，私が（自分の屋外の仕事の成果として屋内に）持ち込んだ或る物を（いま必要だからだしてくれないか，と）求めたところ，（即座には）差し出すことが出来なかったからです」（8－1）

事件というには余りに些細なことであるが，屋内の保管係（ソーソントス）としての自分の務めを十分果たせなかった情けなさ，悔しさ，それに夫の期待に十分応え得なかった申し訳なさなどで意気消沈したのだろう．そんな妻にイスコマスは慰撫の言葉をかける．

「妻よ，私がたまたま頼んだ物をあなたが差しだせなかったからといって（そんなに）意気沮喪しないで下さい．というのは，（丁度いま起きたように，）何か必要な物が（必要なその時に）利用（使用：クレースタイ）できないことは，明らかに貧困（ペニア）そのものではありますが，求めている物どもを何らか受け取れない，というこの欠乏（貧困　：エンディア）は，（入り用な）物が（そもそも）存在しないことを知っているために，初めっからそれを求めることもしないという状態と比べれば，ずーと悩み少ないものなのですから」（8－2）

§18　2種の貧困

上記の文章から，彼が少なくとも2種類の貧困を区別していることが読み取れる．概括すると，

第一種の貧困：端的に（物そのものを）所有していない，という通常の意味の貧困．このような意味で或る物がその家に欠乏し，そのために貧困である場合は，使用しようとしてそれを求めても佳労である．ともかく無いのであるから．この手の貧乏は正に深刻に憂慮すべき貧困であろう．

第2種の貧困：所有しているが，使用すべき時にそれを使用できないという意味の貧困．原文にはないが，この第2種には2つのタイプが区別できると思われる．

第一のタイプは，その物（例えば笛）を所有してはいるが，その正しい使い方（吹き方）を知らない為に猫に小判の状態にある場合．正にオイコノミア術の無知に該当するだろう．

第二のタイプは，少し複雑である．人が種々の物を用いて生活する際，それら諸物の間に，使用し易いように，何らかの機能的連関が工夫され，仕事の段取りという時間性の点でも，適切な配置といった空間性の点でも，それらの諸物を綱込んだ秩序化（システム化）が意識するとしないとに関わらず，どの生活形態においても生じているものであることに，まず注目しよう．さて仕事をしようとする時，その秩序化が適切であれば，必要な時に必要な用具が直ちに手に入り段取りよく仕事がはかどることになるが，それが不適切であったりメチャクチャの無秩序状態であれば，あるべき物もすぐに手に入らないし，あっても他の物との機能的連結が悪く結局仕事に支障が生じることになる．第二のタイプとは正に，生活や仕事における上記のような諸物の機能的・時空間的秩序化の不備から齎らされるもので，不適切な秩序化（或いは無秩序）のために，あるべき物が，あるべき時，あるべき所に無いという欠如性を意味する．

かくしてイスコマコスの慰めは，意訳するとこんなものになろう．「そんなに意気沮喪することないですよ．あなたの失敗は確かに貧困を招きますが，これは秩序（システム）に関わる第2種第2タイプの貧困で，今後

これに留意し配慮を怠らないよう努力すれば克服できるものです．所有してもいないのでどんなに乞うても頼んでも何も出てこない，という第一種の貧困と比べれば，ずーとましですよ」

§19　素直に妻に謝罪するイスコマコス

慰めの言葉に続けてイスコマコスは，失敗の責任は自分の方にこそあると妻に潔く謝罪する．

「（あなたは失敗に悩みに悩んでいますが）そう，でもその責任はあなたには無いですよ，私ですよ．というのも，物それぞれをどこに置かねばならないか，また（必要なものを）どこから手に入れるべきかをあなたが知（れ）るように，私が（あらかじめ）あなたに対して，各々の物がどこに置かれるべきかを指示すること（が大変重要なことだったのですがそれをすること）なしに，（仕事や屋内のさまざまな物をみな）あなたに任せてしまったのですからね」（8－2）

ここでは，家族社会学の観点からも極めて重要な事が何気なく語られている．嫁の嫁ぎ先の家（＝定位家族，定位家庭）では通常，生活や仕事に関する機能的・時空間的秩序が，既に一種の習性（ヘクシス）のように出来上がっているという事実である．つまり，家庭生活の目的に合うように，また家族生活全体がうまく展開し屋内外の仕事全体がうまく連動し易いように，生活や行為の段取りも機能的時間的に秩序化され，家の中の空間も都合よく整理されているものなのである．イスコマコスは，受入れ側の定位家庭を顕在的・陰在的に支配しているそのような秩序を，前以て彼女に周知徹底させることをしなかった責任が，自分にあると謝っているのである．彼のこの態度にはさすがオイコノミアの達人と，ただただ感心するだけであるが，それで驚いてもらっては困る．本論の後章で取り上げるが，彼はこの家庭の秩序を全く新たに根本から構築し直すという革新的なことを妻に提案し，二人で実際に秩序を創設し，維持する手立ても講じていくのである．家族社会学的用語を用いれば，彼らにおいても，結婚した男女が自分たちの生殖家族（家庭）を形成していく過程をいよいよ始めることにした，とでも言えるだろう．しかし強調すべき点は，イスコマコス夫婦の場合，「何故私達は結婚したのでしょうか」の冒頭の問から既に明白なように，家庭生活構築（形成）の節目節目で必ず夫婦ともども対話を交わし，双方納得づくで秩序創設（システム・ポイエーシス）に協同であたっていることである．現代でも希有であるし，永遠の模範的モデルと言えるのではないだろうか．

［余り気付かれていない事であるが，嫁姑の確執も実は，この生活機能・時空間的秩序を巡る確執が根本にあるのではないか．嫁の嫁ぎ先の家庭内秩序の構築や維持の責任者は多くの場合，姑であろう．日用品の収納場所，調理の段取り，生活リズムなど，家族の他のメンバーは気が付いていないかもしれないが，確固とした秩序が姑好みにアレンジされており，そこに自分の実家の秩序感を身につけた嫁が張り切って入ってくることになる．一本のしゃもじ，調味料の位置，食事時間の10分の遅れなど，実に微細なところで歪みが生じ確執が始まる．物理的に同じ家屋に居ながら，生活や仕事の秩序感に関しては各々がいわば異質のポテンシャル場を投射している様子を想像されたい．それらが耳に定かでない仕方で微妙な不協和音を醸し出し不快な気分が増幅されていく．夫も生理的レベルにまで実家の秩序がしみ込んでいてそれを本人も自覚していない．生活を始めたばかりの相思相愛の夫婦の間にも，気分的違和感がどこからともなく立ち昇ってくる可能性は大いにある．それが抽象的に「性格の不一致」といわれる事態の実態ではないだろうか．

この問題への対応はさまざまであろう．差異を差異として楽しむ心のゆとりとか，双方不干渉とか，調整とか無関心など．しかし最良の対策は，二人で新生活を始めるのだから生活を始めるにあたってイスコマコスのように，二人でとことん話し合った末に新しい秩序を構築していくよう努めることであろう．舅姑がいれば彼らも交えて，一般的に言えば，すべての家族のメンバー同士で，新しい生活秩序を築き直してもいい位の気持ちで話し合ったらどうだろうか．高齢（化）社会では老親の方が，息子ないし娘夫婦の構築した秩序の中に恐る恐る入っていくという逆ケースも多くなる点を考慮すれば，メンバー間の話し合いは今後益々重要になると思われる］

§20　秩序に関する基本テーゼと諸例

イスコマコスは妻に，現行の秩序のあらましを伝授しなかったことを深く謝ると共に，「秩序」の意義について，懇切丁寧に説明していく．

まず秩序に関する次の基本テーゼを打ち出す．

「人間にとって，秩序（タクシス）ほど有益で，美なるもの（こと）はありません」（8－3）

このテーゼを裏付けるために彼は，①合唱舞踏隊（コロス）②軍隊③三段橈船④収穫物の収納などに見られる秩序の有益さや美しさ，無秩序の有害さや醜さを，分かりやすく平易に説いていく（本論では解説を省略）．

それもこれもすべて，秩序の重要性を妻に納得してもらいたいからである．

更に彼は，この秩序化の努力こそが妻の先の失態をリカバーする最善の策であるとアドバイスする．

§21　コーラ（場所，空間）の秩序化の重要性

彼の幾分複雑なアドバイスないし主張を図式的にまとめると，

① 妻よ，もしあなたが（具体例で示したような）混乱を欲せず，

② また，保有物（タ　オンタ）を厳正に管理する仕方を知りたいと望み，

③ 更に，保有物の中，使用の必要がある物なら何でもあなたが容易に捕捉でき，私が（必要な）何かを要求するとあなたが即座にそれを渡してくれるという事態をお望みならば，

↓

④ 私達二人でまず保有物の各々に対し，適切な場所（コーラ）を保持するよう試みましょう（＝場所的秩序の創設）

⑤ 所有物の各々に所定の場所を設置したら，次に召使達を教育して，物は（常に）その（所定の）場所から取出し（終わったら必ず）元のその場所に戻し置くようにさせましょう（＝創設された場所的秩序の維持・管理）

↓

⑥ （以上の結果，在るべき場所に在るべき物が常に在る，といった空間（場所）的秩序が常態となるが，そうなると）私達は保有物が安全に（在るべき場所に保管されて）あるかどうかを（一目瞭然）知ることができるようになるでしょう

↓

⑦ （何故なら，そこに在るべきものが存在しなければ）場所自身が不在のものを熱求するでしょうから（秩序が常態になっていればちょっとした綻びもすぐ気付かれる），それに

⑧ 目も，（秩序の中の綻びの場所，つまり）手当を要するところを（見るがままに）詳細に点検でき，

↓

⑨ （最後には）各々の物がどこにあるかの知識が立ち所に発動するでしょうから

⑩ （だから，このような具合に場所的秩序化を構築・維持しておけば，今のあなたのように，必要な物の場所が分からなくて右往左往することもなくなるでしょうよ）

秩序に関する実に見事なプログラムである．

§22　フェニキア商船の驚嘆すべき秩序

イスコマコスは，彼自身の秩序観の原点となった若い頃の体験を語る．乗船したフェニキア商船の驚嘆すべき秩序を彼は永久に忘れることができないだろう．彼が強く感銘を受けた5項目とは，

① 狭い船内に，多数の用具類や商品が高密度に収納されていた点

② 高密度といっても，収納仕方はでたらめでなく，一緒にすべきものは一緒に，離しておくべきものは離して，といった具合にすべての物が適切な仕方で収納されていた点

③ 保管物の管理責任者である舵手の助手の男がすべての物について，どの位の量で，どの場所に保管されているか，その配置図を全部正確に諳じていた点

④ その保管係が，暇さえあれば，すべての物の保管状態を常に点検していた点．その理由は嵐のような不測の緊急事態が生じても必要なものが的確に使用できるようにしておく為とのことで，生死に関わる危機管理の用意周到さに舌を巻く．

⑤ 秩序構築・維持の努力は危険な（人生）航路では当然のことで，それに関して怠慢な者は嵐などの緊急事態に遭遇すれば（神の罰として）立ち所に沈没し生命を失うことになるだろう，という保管係の透徹した人生・自然・神観に感心．

彼がこのとっておきの話を妻に語ったのは他でもない，彼らにとって人生航路の「商船」とは正にこの自分達の「家」である旨，妻によーく悟ってもらいたいの一心からである．フェニキア商船のあの「精密な体制」がこの自分達の家でも実現されることを彼は強く期待している．勿論，かのフェニキア商船の秀抜な「保管係」とは，この家においては「妻」に他ならない．「妻」もかの「保安係」と同様，人生何が起こるか分からないことを洞察して，危機管理の意味でも「家」の秩序構築と維持に全

力を上げていただきたい，というのが彼の本音であろう．

さて，秩序原論の講義を存分に受けた彼の妻は「失態から脱出できる何らかの手立てを（ようやく）見いだしたかのようにとても喜び，出来るだけ速やかに，正に彼が語った（フェニキアの商船の）ように（家中を）整理整頓しましょうと彼に乞うたぐらい」((9－1) 意欲満々の心境になる．

§23　具体的な秩序構築作業の第一段階：この家のデュナミス（機能的可能性，能力）についての説明

自分達の家の秩序構築を実践するときがいよいよ熟したことを見て取ったイスコマコスは，これ以降，妻と二人で秩序創設の本格的作業に乗り出すことになる．その進展は凡そ，次の3段階に区分できる．

第一段階：家の中の部屋や収納場所などが，どんな機能・目的・意義を有しているのか，それらの機能的可能性（デュナミス：能力）を妻に示す

第二段階：次に，家中の用具類を，改めて用途別に分類し直す

第三段階：そして，部屋や収納場所のデュナミスと照らし合わせながら，それら新規に分類された用具類を適切な部屋ないし収納場所に収める

本節では第一段階のみを考察し，後の各段階は後続の2節で簡単な解説を施そう．

第一段階であるが，例の如くイスコマコスは「部屋とは何か」といった根本的なところから話し始める．要諦のみ言えば，部屋は一種の容器として，その中に収納することになっている対象物にとって最も役立つよう工夫して作られている，ということである．つまり各部屋には，或る特定のタイプの物を最も適切に収納・保管するデュナミス（機能的可能性，能力）が備わっている．これをまず知ることが肝要である．

そこでイスコマコスは，妻を伴って家中を案内して回る．そして各部屋を見せてその機能的特徴（デュナミス）を解説し，そのへやにどんなタイプの物が保管されるべきか具体的に教示する．例えば，寝室－ベッド用敷物や用具類，乾燥した部屋－穀物類，涼しい部屋－ぶどう酒など酒類，採光のよい部屋－陽光を必要とする仕事や用具類，等など．

［家や部屋のデュナミス自身を自分達の生活目的に最高に合うようしつらえたいならば，家の新築がベストだろう．夫婦二人で夢の実現に向け，家の規模や部屋の目的・数・大きさ・形・間取りなどを話し合うことは楽しいことだ］

§24　具体的な秩序構築作業の第二段階：家中の用具類の用途別分類

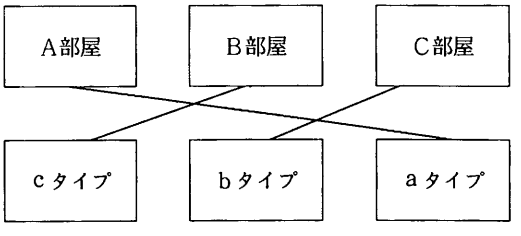
第一段階が完遂すると，イスコマコス夫婦は直ちに第二段階，即ち「家財のすべてを種類毎に別々に分ける作業」を始める．文字通りすべての家財を集めた（壮観な光景であったろう）上で，それらを用途別に体系的に分類していく．彼らの用途別分類項目は次の通り：祭祀用道具，祝祭用女性装身具，祝祭用男性服，戦闘用男性服，女性召使用敷物類，男性召使用敷物類，女性用履物類，男性用履物類，武器類，羊毛紡ぎ用具類，パン作り用具類，魚料理用具類，沐浴用具類，こね桶用具，食卓関連用具類．

更に消費物資については，各々の物資の特性や必要性に合わせて，消費期間に対する適正消費量を算出し，保管すべき量や期間を決定する．

§25　具体的な秩序構築作業の第三段階：分類された用具類や消費物を，適切な部屋ないし収納場所に配置・収納すること

最後に，第一段階で判明した各部屋のデュナミス（機能的可能性）に合わせて，第二段階で分類されたすべての用具類や消費物を，相互に最も適合した仕方で実際にマッチさせ収めていく作業が来る．

例えば，A部屋にはaタイプの物，B部屋にはbタイプの物，C部屋にはcタイプの物が最適合であるとすると，下図のように，上段の部屋群の各々に，下段の道具類・消費物の各々のタイプを適合するよう一対一対応させることに他ならない．



以上，三段階を経て，イスコマコス夫婦の家には，まずは取り敢えず空間的秩序だけではあるが新たに根本から秩序構築がなされたことになる．しかしこれで終わったわけではない．偉大な第一歩ではあるが，言ってみれば端緒にすぎない．この秩序を維持・管理する体制が確立され，日々厳密に執行されねばならないのである．

§26　秩序維持及び管理責任体制の確立

ということで，秩序構築を終えると彼らは時を移さず直ちに秩序の管理体制の樹立に着手する．

具体的には，ほぼこういうやり方である．

家財の種類に応じて，最も相応しいと二人が判断する召使をその管理責任者として任命する．そして彼女（ないし彼）に対し，家財の各種類に応じて夫婦が既に定めた保管場所（部屋）を教示し，それら一切の家財をその者に委ね，安全確実に保管するよう命じる．更に，管理責任体制を総括し監督する者として，彼らが最も信頼する召使をタミアー（家政監督者）として任命し，監督責任体制も併せて確固したものにする．そして，この管理監督責任体制の屋内における頂点に君臨するのが，イスコマコスの妻というわけで，彼女にはその点を十分自覚してもらう事になる．勿論，家庭生活全体のトップは，パートナーシップに基づく夫婦二人であるが．

かくして，空間秩序の構築と維持体制は確立され，二人の生活は軌道に乗って動き始めることになる．イスコマコスの妻は，この自分が最高責任者としてちゃんとやっていけるかどうか恐らく内心不安で一杯であっただろうが，健気にも立ち向かっていくのである．

この後しばらくしてイスコマコスは，お節介のようであるが，妻の派手な化粧について忠告を与え，そこから妻教育のいわば上級コースが始まるのであるが，予定の紙数も大幅に越えたので，2，3の注目事項を除き割愛させていただく．第一点は，濃厚な化粧への注意は嫌がらせでも何でもなく，夫婦は互いの身体を共有する身体のパートナーでもあり双方が互いの真の（まやかしのではない）健康美に関心を持つべきという彼の持論に基づくものであったこと（妻も彼の真意を了解する）．第二点は，彼自身が一日の全体を「美にして善なる生活」として送れるよう最大限の努力を払っている「美善の人」なのであるが，原典の後の章では，妻にも一日を無駄なく上手に活用するよう教示することになる（空間の秩序化を空間のオイコノミアと呼べるとしたら，時間の秩序化はいわば時間のオイコノミアであろう）．これも妻への意地悪な干渉といったものではない．

結　語

以上，イスコマコス（＝クセノポーン）の結婚観，夫婦のパートナーシップ論，秩序論，具体的な秩序構築とその維持，などについて縷々考察してきたが，われわれ現代人が彼らから学ぶべきことは多々あると思われる．その最たる点は，夫婦生活の根幹に関する事項に関しても常に対話（ディアロゴス）を実践し，そのような仕方で夫婦のパートナーシップを確かめ合い了解し合いながら，それと共に夫婦の対話を中核として，彼ら共有の生活秩序（システム）の創設（ポイエーシス）と維持にあたっていることであろう．

最後に，この著においては夫イスコマコスの方が妻をパイデイア（教育）する立場に立っていたのであるが，本論の冒頭でも指摘したように，現代では妻（女性）の方こそ教育役のイスコマコスとなりうることを再度強調しつつ拙論を閉じることにする．

註

参照原典は，Marchant, E.C.：Loeb Classical Library, 1923

1　拙著：オイコノミア思想の一原像，上智人間学会紀要22，1992
（この論文が，「クセノポーンのオイコノミア思想Ⅰ」にあたる）
拙著：クセノポーンのオイコノミア思想，東京家政大学研究紀要第33集，1993
（この論文が，「クセノポーンのオイコノミア思想Ⅱ」にあたる）
拙著：家政学の源流を訪ねて，家庭科教育66巻6号，家政教育社，1991

2　上記の各論文で既に示唆

3　特に上記の東京家政大学研究紀要参照のこと

4　特に上記の上智人間学会紀要論文参照のこと